

泉

伊藤

伊藤整

泉

伊 藤 整

泉

著 者 伊 藤 整

昭和34年11月25日初版

昭和34年12月15日三版

発行者 栗本 和夫

印 刷 大日本印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2ノ1

電話(56)5921~29番

振替番号東京34番

定価280円

泉
目
次

途	翌	記	親	雨	う	清	校	女	教	ユ	新
		憶		の		行	正	性	授	メ	聞
上	朝	喪	友	日	そ	会	室	の	室	ジ	部
		失					で	愛			室

108	93	82	75	65	56	49	42	35	23	11	7
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---

告	二重人格	懇親会	横浜	魔女	後悔	女というもの	知恵と迷い	面会記事	束縛	変容
白	格	会	浜	女	悔	の	い	事	縛	容

215	208	200	191	180	174	160	147	138	129	120
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

泉

新聞部室

富士大学の新学年がはじまって間もない四月の中ごろのある日、学生食堂の裏手の新聞部室で、新入部員の歓迎会が開かれた。

七、八人いる部員の間に、織田守が、新入部員の一人として、その細長い、物置きのような、天井の梁のむき出しに見える室の大部分を占領している大テーブルの角のところに坐っていた。彼の隣りには、高等学校の制服らしい紺サージの服を着た少女が、ひざに両手を置いて坐っていた。成田という上級生の部員が、大きなアルミニウムのヤカンで茶を注いでまわった。そのあとで、原稿用紙が一枚ずつ皆の前に配られた。その原稿用紙が織田守をおびやかした。

昨日四年生の成田圭吉と名乗る不精ひげを生やしたその学生が「銚衡の結果、君に入ってもらうことになりましたし

た。」と言ったのだ。それなのに、いまここでまた何か書かせて試すつもりらしい、と彼は考えた。

織田守は、新聞部の新部員募集のビラを見て、よく考えて見もせずにそれに応じたことを後悔した。札幌の高等学校で新聞部に席を置いていたという以外に、何の自信も持っていなかったのだ。本を読むこと、自分の考えを文字に書くこと、それが活字になること、そして同じ仲間を持つこと、それが、上京してこの大学に入ったばかりで、友達のない彼を新聞部に引きつけた原因であった。東京の大学生たちは、おれの考えかたや、おれの書くものが幼稚だとすぐ分るだろう……

そのとき、成田というその学生が大きな紙袋からバスケットを一つかみずつ、皆の前の原稿用紙の上に配りはじめた。織田守は安心して、そっとため息をついた。

「サラがないわけではないんだ。ただわが新聞部においては、サラよりは原稿用紙の方が常に清潔だというのが実情なんだ。」と配り終ったとき成田が言った。

なるほど、食堂との境になる板壁に沿って置かれてある書棚には、雑誌類や電話帳の類、新聞の綴込みなどの外に、大きな皿が十枚ほど重ねられてあった。あれはポスターなどを書くとき墨汁を入れるのに使うものだな、と織田守は

考えた。原稿用紙が清潔なものだということは織田守も知っていた。しかし不精ひげを生やした成田の手で配られたその菓子はやっぱり汚ならしく思われた。

「この次からは、成田でなく、新入部員の杉木さんにお茶やお菓子を配ってもらうことにしようじゃないか。」と、テーブルの向う端に座長のような格好で坐っていた背広の男が言った。

すると、織田守の隣りにいた高等学校の制服の少女が恥かしそうにうつむいた。おや、この人が杉木さんか、と思つて織田守が見ると、その少女の横顔は少し赤くなつていた。

自己紹介がはじまつた。はじめに、座長のような背広の男は花井七郎と名乗つた。彼は、自分は今年の春に学部を卒業して大学院に入った旧部員であつて、本当は出席する資格がないかもしれないのだが、自分が直接指導を受けている経済学部の深見教授が新聞部の部長であり、たまたま教授が出張旅行に出て今日出席できないので、旧部員の自分に代つて出るようにと命じたのだ、と説明した。

更に花井七郎は、自分は資格がないと言つたが、本学では大学院の学生も学友会費は納入しているのだから、部員の資格を失うはずがない。諸君は、自分のようなO・B・

をボスなどと陰口をきくかも知れない。ボスで結構である。自分はベテランとして、また善意の年長者として、新聞部の諸君を援助してゆくつもりである、と言つた。

皆は笑つて拍手した。花井七郎はあごのよく張つた、背の低い、肩のいかつい青年であつた。

次に立つた成田が、花井さんはどうしても部員だと言ひ張るつもりらしいが、学友会会則の出来た時代には大学院はなかつたのだから、本学の学生なる言葉には大学院学生は含まれていないと解すべきである。従つて花井さんは新聞部員たる資格を持っていない、と自分は思つてゐる、と言つた。

更に成田は続けて、しかし先輩の善意の助言、助力は大いに歓迎するものであつて、花井さんがこの部屋に出入し、諸教授の動静や学内の情勢についてのニュースをもたらすことを禁止するつもりはない、と言つた。また皆が笑い出して拍手した。

そのあと七人の旧部員がそれぞれ自己紹介をした。竹内、鈴谷、仲木などという名前と顔を織田守は覚えようとしたが、途中でごっちゃになつて分らなくなつた。こんな風に、人の名前を覚えられないようでは、新聞部員としておれは落第だな、と彼は考えた。

そのとき、杉木さんの番がきた。杉木さんは、恥しそうに立ち上った。織田守の目の前のテーブルの角に杉木さんの右手の指がかけられていた。小指だけがテーブルの角から外れて、それが細かく震えていた。織田守は胸をしめつけられるように感じた。いま、この人の心が震えている、と彼は思った。

杉木さんはあやという名であった。

「私は、ここにいられる成田さんの出た京北高等学校で、成田さんが卒業されてから新聞部に入っていました。京北の同窓会の集りのときに成田さんに誘われて……。」

杉木さんの声は途中で消えそうになった。しかし、意志で自分の声を支えるように、また高く強くなった。そして彼女は言った。

「私は、さきほど花井さんのお話にあった件には賛成いたしかねます。私は新聞部員として働きたいのです。サービス・ガールとして加えて頂いたのではございません。」

杉木さんはそこで言葉を切った。しんとした沈黙が室中に行きわたった。織田守の目の前で、杉木さんの小指だけでなく、テーブルの端にかけているその右手、そして腕全体がぐくぐく動き出した。するとその手は更に強くテーブルに、小指も一緒に押しつけられ、震えはおさまった。杉

木さんはまた言い続けた。

「私は将来も、できればジャーナリズムの世界で働いて行きたいと思いますが、そういう現実の職場でも、女性はいれば本当の仕事を与えられず、お茶くみをして過ぎねばならないのが実情だということを聞いています。それは改められねばならぬことであると思います……。」

杉木さんはまた言葉につまった。すると突然花井七郎が立ちあがって言った。

「ちょっと、杉木さんのお話の途中でありますが、先ほどの私の提案は、全く失礼なことであり、われわれ日本の男性のエゴイズムをそのまま露出した失言でありました。深くおわびします。富士大学新聞部が初めて女性の部員を得たことの喜びを述べようとして、私は最も不適切なことに言及したのであります。」

花井七郎の話の途中で杉木さんは立っている力がなくなつたように、椅子に坐った。

「私の真意は飲食物は清らかな手で配られるべきだ、ということにありました。」と花井七郎は言葉を切った。

「今後成田君が茶や菓子配るときには、そのひげをそり、その手をもっと清潔にしておくべきであると言いたかったのであります。」

花井七郎の話は皆を笑いに誘おうとする語調のものだったが、だれも笑わなかった。成田が坐ったままで頭をかきながら言った。

「とんだトバッチリだ。」

「しかし、」と成田が言った。「杉木さんを誘つたのはおれだから、責任上、今後はなるべくひげもそり、ツメも切っておくことにするよ。だけどな、杉木さんが来てからおれがオシャレになったなどと言わないでもらいたい。それだけは念を押しておくぜ。」

旧部員の二、三人がそこでくすくすと笑った。織田守は、成田のその話がまた杉木さんを傷つけたような気がした。

「えーと、その次は……」と成田は自分の前に置いた紙を二枚ほどめくって言った。「えーと、織田君、織田守君。」

織田守は立った。

「私は今度英文科に入った織田守であります。札幌の出身であります。家は宿屋をしておりますから、皆さんが北海道へお出かけのときは、何か御便宜をはかれると思います……。」

そこまで言ってから、彼は真赤になって言葉を切った。おれは何というバカなことをしゃべっているのだ。うちの番頭の佐平と同じことを言っている。彼は身の置きどころ

がないように感じた。杉木さんに比べて、おれは何という間抜けだろう……。

ユメジ

新入部員歓迎会のあったしばらく後のある日の午後、織田守は、四年生の成田圭吉とO・B・の花井七郎と三人で、日本橋の製薬会社三葉商会の応接間に腰かけていた。

近目中に出す「富士大学新聞」の新学期特集号のために二週間ほどかかって原稿も一通りそろえた。広告もいくらか集めた。しかしもつと広告をとらないと経費が足りないことが分った。それで昨日から第二回の広告とりに出歩いているのだ。

花井七郎がこんなことを言い出した。

「昔はな、富士大学の学生は三千人ぐらいしかなかったんだ。それに私学の悲しさで、一流会社の幹部には先輩というものが、ほとんどいなかった。」

織田守は、いまの富士大学には二万人近い学生のいることを知っていた。

「要するに広告とりとは、先輩のいる二流か三流の会社の宣伝部をさがし出して、小遣いをねだって歩くことだったんだ。いや、これは部の先輩から聞いた伝説だがね。」

しかし織田守には、今日ここに腰かけていること自体が、先輩のいる会社へ小遣いせびりに来たことだと思われない。その織田守の考えに気づいて、それを否定するように花井七郎は言葉をつづけた。

「しかし、今は、たいていの一流会社の重役陣にわれわれの先輩が加わっている。それに、二万人の学生に対する宣伝効果ということがバカにできないことも分つてきているんだ。」

やっぱり織田守の心は不安であつた。花井七郎が強がって言ったことをそのまま受けとつても、この製薬会社が「富士大学新聞」に広告を出すのは、学生新聞はきき目の少いことが分っているが、後輩がうるさくねだりに来るから、ちょっと経費を補つてやる、ということにすぎないのだ……

「それにだね、この会社の津田宣伝係長は十年ほど前に卒業した先輩で、もとの『富士大学新聞』部員なんだ。大丈夫だよ。」

織田守はいよいよ心細くなった。新聞に広告を出してく

れる所なんて、要するに大学のまわりの文房具店、書店、ソバ屋、パチンコ屋、それに旧部員の勤め先だけではないのか……

さっき訪ねた正門前のソバ屋のおやじは、なんだ、ソバを食いに来たのでなく、金をせびりに来やがったのか。しかし新聞部ってのは相手が悪い。下手なことを書かれても困るし、口止め料として出さねばなるまい、という顔をしていた。あのときおれは乞食に来たような気持ちになったのだが、またこれから、あれと同じ気持を味わうのか？

成田圭吉は腕を組んだまま、黙り込んでいた。四年生の彼は、新聞部の新しい責任者として、何とかこの件をまとめねばならない、と考えているようだった。

そのとき、女の給仕がドアを開けて言った。

『『富士大学新聞』さん、どうぞ。』

三人が通されたのは、今まで待っていた室よりずっと小さい、三畳間ほどの洋間であった。小さいテーブルを前にして、ひげをそったあとが不気味なほど青く見える色白の丸顔の四十ちかい男が腰かけていた。

「やあ、花井君、坐りたまえ。」

縁なしの金のツルのめがねを光らせながらその男が言った。椅子は一つしかなかったので、花井七郎がテーブルの

前に腰かけ、成田圭吉と織田守はそのうしろの壁にそって立っていた。

織田守の目の前に、その男の青白い額とめがねが見え、テーブルの上には、二冊の大型スクラップ・ブックと、花井七郎の名刺が置かれてあった。

「津田さん、今度うちの新聞の責任者になった成田君と、新人の織田君です。」と花井七郎が言った。

成田圭吉と織田守は、新聞部の経費で作った名刺を取り出して、その津田宣伝係長の前に置いた。津田宣伝係長は、ちらと目をあげて二人の顔を見たりきりで、すぐスクラップ・ブックを開いた。それは、後輩だからといってうっかり親愛の情を示すと、きつとその分だけ金をせびられる、という警戒心から出たような冷たさであった。

きれいに爪を切った津田宣伝係長の白い太い指が、広告の切抜きを張りつけたスクラップ・ブックを、ガサガサとめくった。途中で彼は片手でちよつとめがねを持ち上げ、「電話で言っただのはこれだね」と一つの切抜きを指さした。「もう一度これを出したいと言うんだろ？」

「はい、そうです。」

「よくないな、これは。」と津田宣伝係長は身をひいて言った。

彼は立ちあがつて室を出て行き、ハترون紙の袋を持って来て、その中から、自分の掌ほどの大きさの薄い紙型を取り出した。彼はそれを成田の前に出して、

「これにしておきたまえ。」と言った。

「はあ。」

成田は手を出さなかった。それは前の切抜きよりも一まわり小さかったからだ。広告料も従って安くなる。

「心配しなくていいよ。」と、津田がにやりと笑って言った。

「広告料は前と同じで、八千円ここに入れておいたよ。」

「はあ、ありがとうございます。」

花井は、見破られました、と言うように頭をかいた。成田圭吉が受領証を書いて渡すと、津田はうちとけた調子になった。

「どうだい？ 新学年特集なんだろう？ うまく行ってるかね？」

「はあ、どうにか。」

「トップ記事は何だい？」

成田圭吉が答えた。

「『人格主義は可能か』という題です。」

「はあ、軽部教授の『新人格主義』を取り上げたんだな。」

まあ、あれは今の生活者の根本問題だからな。」

津田宣伝係長はちよつとわが身を考えるような顔をした。三葉商会を出て街を歩き出すと、花井七郎が言った。

「部の不文律は正確に守らなくっちゃいけないぞ。富士蕎麦の二千円と三葉商会の八千円と合計で、今日の収入は一万円だ。われわれは足代として一割の千円を使っているところになっている。地下鉄で定期券のきくところまで往復するとして、三人で百二十円だ。あとの八百八十円はわれわれが使っているわけだ。」

花井七郎は、成田圭吉のポケットに入っている金を、自分が持っているかのような確かさで論じた。

「花井さん、何処がいいですか？」

と成田圭吉は、親切な先輩の労をねぎらうように聞いた。「おい、おめえは、おれが飲むのをたのしみにして来たみたいに言うじゃねえか。」

花井が背広の上着のポケットに両手を突っ込んだままで、成田に向き直り、からむように言った。

「いや、そういう訳じゃないんです。」と、成田圭吉が口ごもった。

「もっとも、おれは、そう言われれば、凶星をさされたようなところもある。」

成田圭吉と織田守が吹き出した。

「しかしだな、飲むのだけを目的にして君たちについて来たわけじゃねえんだよ。やっぱり、親切、と言うと大げさだが、君たちだけでうまくやれるかな、という気持があればこそだい。」

「なるほど。」と成田が言った。

「そうだろ、分るだろ？」

「ええ、よく分りますよ。ビールを飲みましょうか？」

「そういうところだろな。青葉が出そろって、いい気候じゃねえかよ。」

「そうです。」

三人は言い合せたように、日本橋から銀座の近くまで、しゃべりながら、ゆっくり歩いた。

織田守は先輩たちの話が面白かった。彼にとっては広告取りに歩くのは今日がはじめてであった。金を出す側の人間としての富士ソバのおやじの顔、三葉商会の津田宣係長の態度、その表情の変化などが、彼の心に刻みつけられていた。

また、今日花井七郎が、成田と織田が三葉商会に行くと言い出すと、「よしおれが津田先輩に話してやる。」と言って、すぐ電話をかけたことや、そのあと当然のようにして

連れ立って来たことも彼は思い出していた。

ビールを飲むというのが、この人にとって、そんなに楽しみなのかな？ というのが、織田守の心の底の方にある疑問だった。酒は、決してうまいものとは彼には思われなかった。しかし、大人たち、大人になったふりをする青年たちは、酒を飲むことを生活の最上の楽しみのように何の疑いもなく決めている。

だから自分も、彼等と一緒にいるときは、それが楽しいものだという顔をしていなければならないのだ。おれにとつては、あれは楽しいものじゃない。おれは酒を飲むと気が持が不安になるだけだ、と彼は考えていた。

夕方に三人は京橋のかどの大きなビヤホールの中にいた。あたりには人が群れ、話声や物音で沸き立つようであった。三人の前には生ビールの大きなジョッキが配られていた。

「軽部教授の『新人格主義』を第一面のトップに持ってきたことにはおれは賛成できないな。」と花井七郎が言った。「しかし、それには色々理由があるんですよ。富士大学からは、文士は出て評論家が出ない、という定評があるでしょう。」と成田圭吉が、新しい責任者の立場から説明しはじめた。

「だから先ごろの軽さんの『新人格主義』が大きな反響を